

◆著作奨励賞

著者：福井一喜

書名：『「無理しない」観光 価値と多様性の再発見』

出版社：ミネルヴァ書房

出版年月：2022年2月

本書は、「資本主義やグローバリゼーションの激化、日本経済の悪化、人口減少と地方の衰退、自治体の財政難、超高齢社会、安定雇用の崩壊、新自由主義の徹底と限界」(i～ii頁)といった、様々な問題や矛盾に満ちた現代社会の中で生じている現象として、観光のあり方を根本的に問い直すことを目指した、意欲的な著作であると言える。

序章では、「観光で経済を活性化する」ことを大前提として展開されてきた様々な政策・言説・取組みのあり方が批判的に検討された上で、本当に観光が経済活性化に寄与するか、「観光の世界の外側に立って」(26頁)検討する必要性が指摘される。続く第I部では、「観光による経済活性化の限界」(ii頁)が多角的に様々な資料を駆使して論述されていく。

第1章では、大都市での観光開発や高付加価値化が富裕層と一般消費者との格差拡大を招く点や、観光を活用し「稼ぐ」ことを目指してきた日本の観光立国政策が、東京と地方や正規雇用と非正規雇用等の格差を悪化させてきた点が指摘される。第2章では、観光産業が抱える特有のリスク(サービス商品の特性による損失の起きやすさ、高コスト体質)を回避しようとするほどに、地域間格差や雇用格差が拡大してしまう理路が説明される。第3章では、プラットフォームビジネスであるOTAが特に小規模宿泊施設の低収益構造をもたらしてしまう問題等、観光のデジタル化の孕む矛盾が指摘される。

第II部では、「観光のさまざまな価値と、それを具現化する方法」(ii頁)が論じられる。第4章では、生産性の低さや中央集権的な行財政システムにより、観光による地方自治体の財政難の解決が不可能である点が指摘され、政府が為すべきは地域住民や観光産業への「自助努力」の要求ではなく、地方交付税などの行財政システムや年金制度等の抜本的改革であると主張される。第5章では、地域の「ローカルな限定性」や「観光の価値の多様性」を生かすことに関する国内外の事例が提示される。「人間がどこかに行き、変質して還ってくる現象」(255頁)として、観光が「変質性」と「還流性」という観点から根本的に捉え直される点、また、観光により世界が「ごちゃまぜ」(250頁)になり地域や人々が変化していく運動が肯定的に評価される点が、本書の議論構築の上では特に重要である。この観点到に沿い、農村の保全や、IT産業・製造業の地域的な発展に観光が間接的に寄与する国内外の事例が挙げられ、「経済の活性化のためには、無理に観光消費額を増やそうとするよりも、観光の間接効果を生かして、観光以外の産業を育てた方がよい」(272頁)と主張される。続く第6章では、観光と「暮らしやすい地域」の形成、及び観光と文化や国土を守ることとの関わりが論じられ、観光の「非・経済的価値」(315頁)を追求すること、「消費されない観光」を目指すことが必要であると主張される。終章では、観光を巡る「構造的不正義」に加担することが批判された上で、「観光を生かした人々の自由なネットワーク化や、地域の

2022年度 観光学術学会 学会賞  
受賞作と講評

パラダイムの再構築による経済の活性化、地域の暮らしやすさ、景観、文化、国土を守る観光など、本来の自由な観光には多様な価値がある」(348頁)という認識のもと、それらを守る「無理しない観光」を目指すことが、即ち、「自由で、無理の無い社会」を目指すことにもなるという結論が提出される。

以上の祖述からも明らかな通り、本書は「観光による地域経済の活性化」という大前提を疑い批判的に分析すると共に、観光の持つ「非・経済的価値」や「消費されない観光」の追求こそが、地域や人々にとって今後必要な取組みであると主張する、明瞭な目的意識と結論を持つ書籍であると言える。パンデミックを経て、再度、「観光」の本質やあるべき姿を原理的次元から批判的・俯瞰的に再考する必要性がある現在、大変示唆に富む見解を多数提出している点が高く評価される。また、筆者は地理学を専攻としつつも、政治哲学や社会学等の諸学も参照し、巧みに自身の議論構築に援用しており、観光学の学際性の洗練への寄与という観点からも本書は評価される。以上の点より、本書は「著作奨励賞」に該当すると判断する。